

モデルは気象庁の数値予報モデル内で使われている地表面過程のモデルである SiB モデル (Simple Biosphere model) を改良したものである。土壌水分は、地表面からの蒸発量を決定する重要な要因である。しかし、地表面モデルで計算される土壌水分量は各々のモデルの概念や計算方法などによって異なったものとなる。さらに土壌水分量は、モデルの他の物理量に比較して時間スケールが長く、平衡に達するまでの時間が長い。したがって、特に数値予報モデルのように短期の結果を見る場合には、それぞれの地表面モデルに適合した土壌水分の初期値が重要となる。

また、この CD-ROM は1987~'88年の実況的なデータである。土壌水分が、特に降水量に深く関係している様子が、この両年の結果の違いにも現れている。なお、'87年はエルニーニョがおきていた年であり、世界的に異常気象が話題になった年でもある。それらの異常気象が土壌水分量にどのように影響を与えるのか、また逆に土壌水分量が異常気象にどのように影響を与えるのか、興味を持たれるところである。

4. 中国乾燥地域における地空相互作用の観測と現地視察

甲斐憲次 (筑波大学・地球科学系)

中国の北西内陸部に位置する河西回廊は冬から春にかけて、異常に乾燥する。植生が乏しく、あたりは茶一色の世界となる。しかし、内陸河川・黒河の水による灌漑が施される初夏から秋にかけては、鮮やかな緑地がこの回廊を埋め尽くす。かつて、この回廊沿いのオアシスをつないで、シルクロードが発達したのはなるほどと思われる。また、晩冬から春先、日本では黄砂がしばしば観測される。河西回廊とその周辺のコビ砂漠は、黄砂の発生源の一つである。

文部省国際共同研究事業「黒河流域における地空相互作用に関する日中共同研究 (HEIFE)」は、この河西回廊において、地空相互作用に関する基本観測 (FOP) が約2年間、集中観測 (IOP) が春夏秋冬ごとに2週間程度実施された。今回の発表では、筆者が参加した、オアシスと砂漠の熱収支観測、発生地における黄砂のライダー観測等の結果について報告した。

さらに、科学技術庁科学技術振興調整費「砂漠化機構の解明に関する国際共同研究」では、タクラマカン砂漠とその周辺を現地視察した。スライドを中心に、砂漠化の現状も併せて報告した。

第10回メソ気象研究会開催のお知らせ

日時：1996年11月5日 (火) (大会前日)
15:00~18:00 (予定)
場所：名古屋国際会議場 (大会会場)
B会場 (1号館3階133, 134号室)
テーマ：「暖候期の日本付近のマルチスケール・メソ α 降水系について」(仮題)
コンビナー・問い合わせ先：
加藤内蔵進 (名古屋大学大気水圏科学研究所)
TEL: 052-789-3494 (直)
FAX: 052-789-3436
e-mail: kuranos@ih.s.nagoya-u.ac.jp

プログラム (予定)

1. 二宮洸三 (気象業務支援センター):
メソ α 降水系のマルチスケール構造の実態。
2. 瀬古 弘 (気象研究所):
メソ β 降水系の数値モデリング。
3. 未定: 新しいルーチンモデルでのメソ α 降水系
4. 加藤内蔵進:
梅雨前線上のメソ α 降水系研究の展望。
5. 総合討論